

## 平成 29 年度 学融合推進センター 学融合レクチャー実施報告書

講義名	科学コミュニケーション
申請代表者 (授業実施責任者)	研究科：生命科学研究科
	専攻：基礎生物学専攻
	氏名：倉田 智子
開催日時・場所	平成 29 年 8 月 7 日(月) ～ 平成 29 年 8 月 9 日(水) 野辺山キャンパス (国立天文台 野辺山宇宙電波観測所)
受講者数	情報学専攻：2 名
	天文科学専攻：1 名
	宇宙科学専攻：1 名
	基礎生物学専攻：1 名
	生理科学専攻：1 名
	その他 (外部) 東京大学理学系研究科天文学専攻 1 名

## ○ 授業概要

本講義の目的は、多様な分野で活躍する研究者を目指す若い大学院生へ、科学 (学術) コミュニケーションの基礎を身につけてもらい、それを自分の研究活動に活かす方法を考えてもらうことである。また、本レクチャーの目標は、社会とのコミュニケーションを意識しつつ、それを活かすことのできる研究者を養成することである。そのための基本的な方法を理解する。具体的には、①研究者の説明責任について理解する。②分野外の研究者や一般を対象とした研究紹介を円滑に行えることを目指す。③科学報道を中心に、社会における科学 (学術) の情報流通についての理解を深める。

## ○ 実施報告

学融合レクチャー「科学コミュニケーション」を平成 29 年 8 月 7 日～9 日の日程で野辺山キャンパス (国立天文台野辺山宇宙電波観測所) にて開催し、総研大生 6 名、外部の院生 1 名の計 7 名が受講した。

本レクチャーでは、研究者に求められる社会とのコミュニケーションについて、科学と社会の間の情報交換をいかに行うか、行われているか、についての基本知識、及びそれを活用するための実際的な知識を、講義と演習によって学習する。演習では、自身の研究について一般向けに紹介するという課題を提示し、受講者はそれぞれ口頭紹介および文章作成に取り組んだ。

## &lt; 担当教員 &gt;

総合研究大学院大学 基礎生物学専攻 助教 倉田智子 (基礎生物学研究所 広報室)

広報社会連携室 室長/学長付/天文科学専攻 講師 眞山聡

天文科学専攻 准教授 山岡均 (国立天文台 広報室長)

名誉教授 平田光司 (遠隔講義で授業実施)

沖縄科学技術大学院大 准副学長 (広報担当) 森田洋平

ワック株式会社 科学番組ガリレオ X ディレクター 泉大知

朝日新聞社 科学コーディネーター 高橋真理子

スケジュール

	1 日目 (8.7)	2 日目 (8.8)	3 日目 (8.9)
		朝食 (天文台の食堂)	朝食 (天文台の食堂)
1		「基礎科学の広報」 森田洋平 (OIST) 90 分 9:00-10:30	演習 III 研究を社会に向けて紹介 (相互評価) 90 分 9:00-10:30
2		「天文学における科学コミュニケーション」 山岡均 (総研大) 90 分 10:40-12:10	演習 IV 研究を社会に向けて紹介 (相互評価) 90 分 10:40-12:10
	12:00 野辺山駅に集合 天文台に移動後、昼食 (天文台の食堂) ・野辺山キャンパス散策	昼食 (天文台の食堂) 12:10-13:30	昼食 (希望者のみ) 12:10-13:30
3	「科学コミュニケーション概論」 眞山聡 (総研大) 90 分 13:30-15:00	マスメディアと科学 I 「科学ドキュメンタリー番組の作り方」 泉大知 (ワック株式会社) 90 分 13:30-15:00	天文台見学 (希望者のみ)
4	「科学の成果がニュースになるまで」 倉田智子 (総研大) 90 分 15:10-16:40	マスメディアと科学 II 高橋真理子 (朝日新聞編集委員 朝日新聞社) 90 分 15:10-16:40	
5	演習 I 口頭で研究をシンプルに紹介 90 分 16:50-18:20	演習 II 文章作成：研究を社会にむけて紹介 90 分 16:50-18:20	
	夕食 (天文台の食堂) 19:00-	夕食 (天文台の食堂) 19:00-	
6	「科学技術社会論」 平田光司 (総研大) 遠隔講義 60 分 20:00-21:00	マスメディア交流会 星空観察 20:00-	
夜	交流会 星空観察 21:00-		

科学コミュニケーション概論

社会にむけた研究者の情報発信を概観し、科学コミュニケーションの意義について紹介。

科学の成果がニュースになるまで

情報の受け手を意識した文章の作り方について、また情報流通の事例紹介として科学の論文発表からニュース発表に至るまでの過程を紹介

科学技術社会論

研究者のコミュニケーション能力が必要となってきた社会的背景を科学技術社会論の視点から解説

基礎科学の広報

基礎科学における広報活動を紹介し、成功例や、ミスコミュニケーションを発生させた失敗例などから、学術成果を社会に伝える意義や方法について考える

天文学における科学コミュニケーション

天文学と社会との関わりについて、アウトリーチ活動やオープンサイエンスの取り組み

みを中心として紹介

#### マスメディアと科学ⅠおよびⅡ

科学記事や科学番組がどう作られるか、どのような視点でニュースを作っているのかを、新聞記者、テレビ番組制作者が紹介

#### 演習（口頭）

自分の研究について専門外の人を対象に口頭で手短かに説明する課題に取り組む。学生同士で相互評価すると共に、ビデオカメラを用いて自身の話し方や身振りなどを確認する機会を設けた。

#### 演習（文章作成）

自分の研究について一般向けに紹介する文章を作成する課題に取り組む。文章を学生同士で相互評価すると共に、招待講師・参加全教員がコメントを行った。後日、完成版をレポートとして提出。

#### ○ 授業評価

受講者は、レクチャー期間中を通して自身の研究をどのように社会に伝えるかについて考え、一般向け研究紹介の文章を完成させた。本レクチャーの最大の特徴は、人里離れた天文台において合宿型で開催されているところにある。受講者はレクチャー期間中、授業内容や課題作成に十分に集中することができている様子であった。また、授業時間以外にも、受講者と教員との交流、受講者同士の交流、受講者とジャーナリストとの交流が行われるようなレクチャー設計となっており、今回もそれが有効に機能したと考えている。専門外の人を対象としたコミュニケーションを実践するには、複数の専攻からバックグラウンドが異なる受講生が集まることが重要であるが、今年度も5専攻からの参加があり、適切な環境であったと考える。受講生は、最終レポートとして一般向けの研究紹介文章を完成させた。それぞれの受講生が、今後、研究者として社会と交流する上で、この経験を活かしてもらえればと期待する。本年度は新たに、日本有数の科学広報・アウトリーチ実施機関である国立天文台の広報室長を務める山岡均准教授が担当教員に加わったことで、より多くの事例が紹介され、受講生自身が今後どのように社会と科学との交流を実施していくかをより具体的に考える機会を提供できたと考えている。来年度以降も、本レクチャーを継続実施するとともに、自然科学のみならず人文科学分野の受講生の参加が得られるように努力したい。